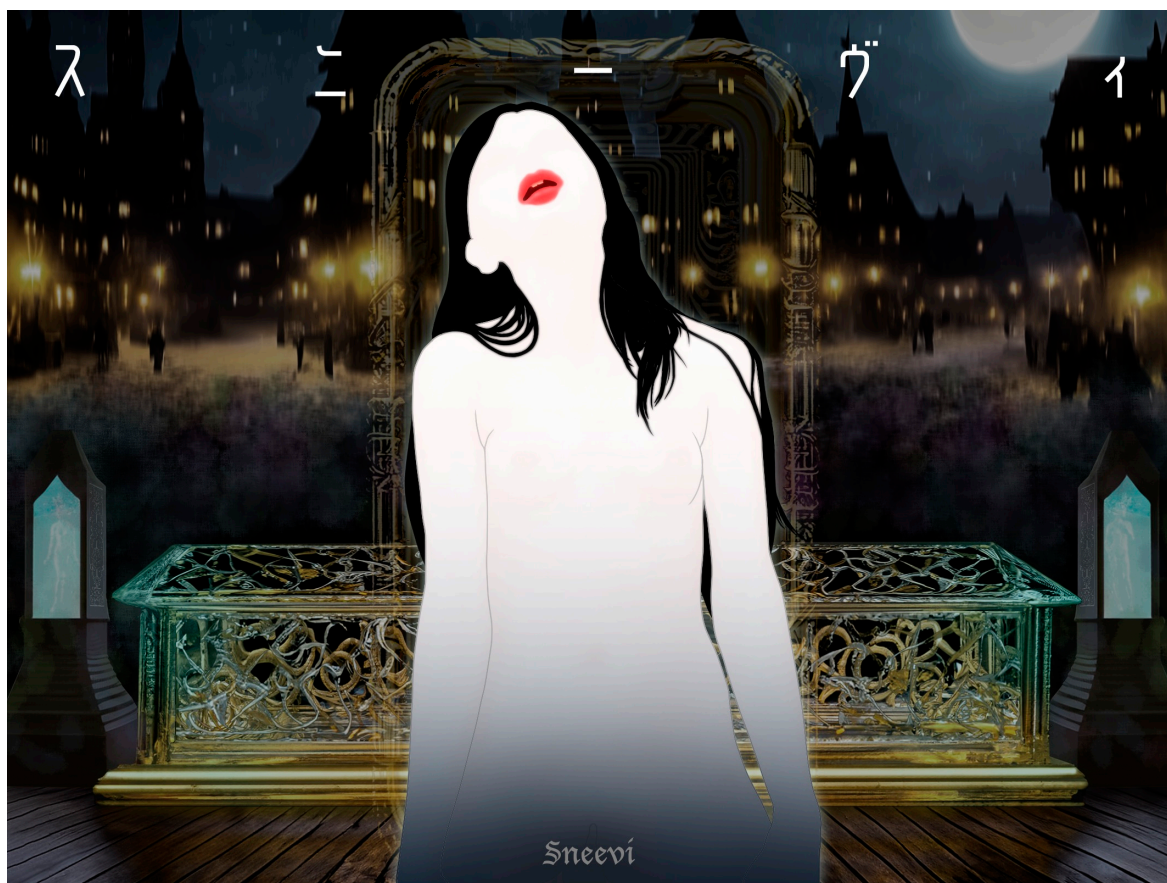




一

男はテルヴェと名乗り、娘を捜し出してほしいと言った。焦げ茶色の髪と口髭に焦げ茶色の目、薄黄色の糊の利いた襯衣に薄茶色の上着を羽織っている。地味な色合いだが仕立ては良さそうで、打ち出し模様のついた釦が銀色に光っていた。

四十前後だろうか、下がり気味の目尻によったしわが人の良さそうな雰囲気を作り出し、柔らかい声がそれを後押ししていた。

「妻は恐ろしい女なのです。スニーヴィが生きていることを知ったら、何をするかわからない。一刻も早く見つけ出してほしいのです」

依頼人はほとんど哀願するような調子でそう言った。弁護士をしていると言い、報酬は倍でも三倍でも払うと言った。

「テルヴェさん、あなたのお話が事実なら、警邏隊に知らせるべきことではありませんか。その方が娘さんも安全に早く見つかるのでは」

男は眉根を寄せて、哀れみを誘うような顔をした。若い頃は年上の女に気に入られたかもしれない、そんな顔に見えた。

「それができるなら、ここには来ません。私のような仕事では信用が第一なのです。こんな恐ろしい騒ぎが表沙汰になったら、誰も私のところに離婚の相談など来ません」

「ふむ、そういうものですか」

テルヴェの話は確かに人に知られたくはなさそうなことではあった。テルヴェの妻はエネムットといい、彼の言葉によれば「恐ろしいほど」の美貌の持ち主なのだという。さる資産家の娘で、テルヴェの商売がうまく

運んだのも妻の後押しのおかげらしい。二人には十一になる一人娘がおり、名はスニーヴィ、父親によればこちらも「恐ろしいほど」の愛らしさなのだという。

スニーヴィは父親にはよく懐いたが、母親とは折り合いが悪かったと彼は言った。

「妻は娘を憎んでいたのです。いや、怖れていたのかもしれない」

「娘さんには何か特段気になることでもあったのですか」

テルヴェは首を横に振った。

「そんなことはありません。あんな愛らしい娘がこの世のどこにいますか」

うのでしょうか。でも、それがエネムットにはたまらなかつたのでしょうか」

スニーヴィは利発で愛らしく美しい娘に育つたが、彼女の母親は次第に娘が自分よりも美しくなることに嫌悪を抱くようになったのだと言う。

「娘が七つになった頃からでしょうか、妻は鏡を見ては独り言をつぶやくようになったのです。私は美しい、私は美しい、私はスニーヴィよりも美しいと」

エネムットは娘に冷たい態度を取り、避けるようになったとテルヴェは言った。

「娘さんを、例えば打つとか、そう言ったことは」

テルヴェはそれはないと言った。それどころか、娘を怖れているような心配さえあつたと言う。母と娘は互いを避けるようになり、スニーヴィはますます父親と近い様を見せるようになった。娘は十を過ぎた頃から肢体に女らしさを感じさせるようになり、匂うような美しさを放つようになったと、テルヴェは言った。

「ちょうどその頃、一年ばかり前ででしょうか。妻は家に出入りの骨董屋から手鏡を買いました。金色の飾り縁がついた四角い手鏡で持ち手のない変わった感じのものでした。妻はそれがいたく気に入ったようでした。豪華な鏡台や大きな姿見もあるのに、その古びた手鏡をよくのぞき込んでいました」

一度だけテルヴェはその鏡を間近で見たことがあると言った。

「妻が浴室に置き忘れていたのです。何気なくのぞき込むと、不思議なことに鏡は真つ暗で何も映っていませんでした。ただ、黒い滑らかな陶板のようなものに編目模様がうっすらと見えるだけでした」

妻はすぐに浴室に戻ってきて、夫の手から鏡を奪い取ると恐ろしい目つきでにらんだ。そして「これは私の鏡よ」と言つて出て行つたのだと言う。

「妻はスニーヴィが自分の若さと美しさを吸い取つていると思ひ込んでいたようでした。その手鏡に向かつて、小じわや染みを見つけると、低い声で、あの子のせいだ、あの子のせいだと、つぶやいているのを幾度も聞きました。鏡に何か悪いものが宿つていたのか、あるいは妻の正気が次第に失われていたのか、わかりませんが、恐ろしいことがおきました」

テルヴェの額にはうっすらと汗が滲んでいた。依頼人はマシユウ茶を

一口飲んで話を続けた。

「ある日、仕事場から家に帰ると、いつもならすぐに飛んでくるスニーヴィの姿がありません。妻に聞くと、買い物に行くと言って出たままだと言うのです。しかし、使用人に聞いても、誰もどこへ行ったのか知らないと言うのです。スニーヴィが私が帰る時間に家にいなかったことなど、一度もないのに。聞けばレニードという庭仕事などやっている男がいつていつたと言います。その男の姿もありません」

日も落ちてどうしたものかと思つてるところへ、レニードが一人で戻ってきた。娘はフクスリナ神殿の森でちよつと目を離れた隙に姿が見えなくなつたと彼は言った。あたりを散々捜したが見つからなかつたと言う。

「レニードの話をそのまま信じることはとてもできませんでした。若い庭師は妙におどおどとして、問い詰めると冷や汗をかいて話がしどろもどろになります。ところが、妻はさして心配する様子もなく、レニードをかばうようなことを言うのです。揚げ句の果てにスニーヴィは近頃、学校のある男の子が気になつていたようだから、二人でどこかに潜んでいるのではないか、などというのです。スニーヴィはまだ十一です。人目をひく美しさとは言え、まさかそんなことがあるとは思えません」

テルヴェ自身もその話をしながら冷や汗をかいているように見えた。テルヴェの妻は警邏隊に知らせるでもなく——彼女もまた外聞を気にして——一晩立てば戻ってくるかもしれないなどと言って、寝てしまった。彼らの家の主は妻エネムットで、彼女の意志に反することを行うのは夫といえども困難なのだと言った。

「私は娘が心配で眠れず、何か飲み物と思い廊下に出ました。すると妻の寝室から——もう長いこと私たちは寢屋を別にしていました——声が漏れ聞こえてきました。聞き耳を立てると、恐ろしい話が聞こえてきました。声は二つ、一人は妻、もう一人はレニードのものでした。妻はこう言いました。

『死体は間違ひなく沼の底に沈めたんだね』

レニードが答えます。

『はい、奥様、心の臓を抜き取つた後、石を詰めて投げ込みました。フクスリナの沼は底なし沼、あそこには何人も身を投げた者がいますが、骸は上

がったことがあります」

『よくやったね、レニード。この血であの子に吸い取られた私の美しさを取り戻すことができる』

それから何かびちゃびちゃという濡れた音がかすかに聞こえてきました。それが途切れるとまた妻の声が聞こえました。

『次はあの男だね。たいした稼ぎもないあんな役立たずにこの家をうるうるさせるのは、もう我慢がならない。明日、一緒にあの子を捜しに行く振りをして、あいつもフクスリナの沼に沈めておしまい』

『はい、奥様、仰せの通りに』

その後、二人の睦言が聞こえてきましたが、私は怒りや憎しみよりも、恐ろしさと何よりも悲しみに耐えきれずにその場を逃げ出しました。私の愛しいスニーヴィが心の臓をえぐり取られて底なし沼に沈められたとは！ 私はいても立ってもいられなくなり、フクスリナ神殿の森にある沼に走っていききました」

深夜の人気のない沼の辺で娘の名を泣きながら呼んでいると、不意に誰かが彼の腕をつかんだ。それはあの使用人だった。テルヴェはすぐにも沼に沈められて殺されるものと思ひ必死で抵抗したが、レニードの様子は違っていた。エネムットは夫が逃げ出したのに気づき、レニードに追わせただが、使用人は彼を殺そうとはしなかったのだと言う。

「レニードはこう言ったのです。」

『旦那様、確かに私はお嬢様を沼に沈めて殺すように命じられてここに連れ出しました。でも、私にはどうしてもできませんでした。あんなに愛らしいお嬢様を殺すことなど、誰にもできやしません』

レニードは娘に家には絶対に戻ってはいけない、とにかく逃げるようにと言って、沼の辺に置き去りにしたと言うのです。心の臓は肉屋に無理を言っただけのそれを売ってもらったと言いました。

『もう、私は恐ろしくて奥様にお仕えすることはできません。このままお屋敷を出て、どこかに身を隠すつもりです』

レニードはそう言って去っていききました」

テルヴェは沼のまわりや森の中、神殿の周辺をくまなく捜し回ったが、娘の姿は見当たらなかった。妻に見つかからないよう、しばしば宿を変えながら、娘を捜し続けたが未だ取り戻すことができないのだと言う。

「何か、少しでも手がかりはないのですか。娘さんが身を寄せそうところろ、あなたの親類縁者のところや、学校の友人のところとか」

テルヴェはそれとなくそうしたところも探したが、娘はいなかったと言った。

「ですが、実は一つ、手がかりというか、噂らしきものがあるにはあるのです」

テルヴェは手巾を出して額の汗を拭った。

「ある夜、悲しみを紛らわそうとクラシーヤ街の酒場で飲んでみると、恐ろしく美しい娘をワブラ街で見かけたという話を耳にしたのです。その話をしていた男はかなり酔っていて、一緒に飲んでた男たちも本気にしていないようでした。ワブラ街みたいな怪しい場所にそんな年端も行かない娘がいるわけがないと。しかし、その男は絶対に見たと言い張って譲りませんでした」

テルヴェはその男に酒を驕って話を聞き出そうとしたが、酔った男の話は要領を得ず、ただワブラ街で驚くほどきれいな娘を見たということを繰り返すだけだったと言う。

「ワブラ街には行ってみたのですか」

テルヴェは弱々しくうなずいた。

「ええ、行きました。しかし、どうにも私には場違いなところでした……。目つきの悪い男たちや毒々しい化粧の女たちが街角に立っていて、あんなところに娘がいるとは思えませんでした。いかがわしい店に引つ張り込まれそうになって這う這うの体で逃げ出した始末で……」

「ふむ、まあ、あの辺りはそういうところですね」

ワブラ街はクラシーヤ街に隣り合う酒色の街だが、怪しげな店や曖昧宿も多い。テルヴェのような男にはあまり縁のない場所だろう。

私は彼の娘を捜してみると言い、弁護士は少しだけ明るい面持ちになった。奇妙な手鏡を売ったという骨董屋の名前と所を訊き出し、それからスニーヴィという娘の容貌を尋ねた。

雪のように白い肌、黒檀のように黒い髪と瞳、血のように赤い頬と唇、

テルヴェは娘の姿をそう語った。

「肖像画のようなものではありませんか」

私がそう尋ねると彼は無いと答えた。妻がそういうものを描くことを

許さなかったのだと言う。

当座の掛かりにしてほしいと言って、依頼人はかなりの額のダズン金貨を置いて帰った。

二

ワブラ街に行く前にクラシーシャ街の飲み屋を幾つか回り、それらしい娘の噂を探った。テルヴェが噂を聞いたという店にも行って見たが、収穫はなかった。

五軒目の店の止まり木でアイコンをなめながら店主に話を聞いていると、静かに隣の席に座った男がいた。店主は何も知らないと言って、他の客のところへ行った。

隣に座った男は暗灰色の頭巾つき外套を羽織り、鉄縁の丸眼鏡をかけていた。血色の悪い瘦けた頬に無精髭が疎らに生えている。艶のない長い黒い髪頭が頭巾からはみ出していた。男は私に肩を寄せるように近づき、かすれた小聲で言った。

「若い娘を捜しているのかい。うんと若い娘を」

「まあ、そうだね」

男は薄い唇を歪めて笑い顔を作った。細い指を広げて見せた。

「これくらいなら、どこにでもいる」

男は親指から順にゆっくり指を折っていった。

「これくらいになると、なかなかね」

薬指と小指だけをのばして、男は喉の奥でくくつと笑った。薬指を折り、小指一本だけを立てて、その手をゆらゆらと左右に動かした。

「あんたの捜してる娘はこれくらいなんだろう」

「ああ、そうだな」

「御足はあるんだろうな」

男は小聲だがきつい口調でそう言った。

「そりゃあ、どれくらいかによるね」

男はまた指を動かして、金額を示した。ダンカル川沿いの妓楼で三人分にもなる額だった。

「ふっかけるなよ」

「嫌ならいいんだ」

男はまた小指一本を立て、私の目の前でゆらゆらさせた。私はその指をつかんで手に力をいれた。

「誑かそうとしたら指をへし折る」

男は苦痛に顔を歪めたが、口元にはそれでもにやにやとした笑いが残っていた。もう片方の手を出し、また小指を立てた。

「嘘は言わねえ、これだ、これ」

私は男の指を放した。

「ついてきな」

男は小指をさすりながら、そう言って立ち上がり、店を出た。男は時折振り返って私がついてくるのを確かめながら、人気の少ない方へと歩いていった。

ワブラ街に来るのは久しぶりだった。デリン灯もあり、鮮やかな色合いの提灯や洋灯が店々と行き交う人々を照らすクラシーシャ街とは違い、街は薄暗く人通りも疎らだった。仄暗い赤や紫、青の灯が小さな店の前に掲げられている。扉にはそういうのが流行りなのか、〈秘密の小部屋〉だの〈愛しき花びら〉だの〈恋の蜜〉だの、その手の名前が古めかしく見せかけた書体で書かれていた。

暗い路地の入り口に半ば身を隠すように帽子を目深に被った男が立っていた。丸眼鏡の男はその男に何かささやきかけ、帽子の男がわずかにうなずいて道を空けた。

路地の突き当たりの木戸を案内の男が開けると、小さな洋灯が点った玄関があった。男が何回か間を置いて扉を叩くと、鍵を回す音が聞こえた。扉が開き、手燭を持った太った男が顔を出した。黒い巻き毛が肩まで伸びている。

「お客様だ」

丸眼鏡の男が小指を一本立てて見せた。太った男は黙ってうなずいた。玄関に入った正面の扉には菱形の小さな硝子窓があって、中から灯が漏れていた。

太った巻き毛の男がその扉を開けた。広めの部屋は奥に暖炉があり、弱々しく火が燃えていた。脇の方に置かれた丸い卓子の上で洋灯が点つ

ている。不揃いの椅子が何脚かばらばらに置かれていたが、子どもが乗るような木馬も一つあった。椅子に二人、木馬に一人、女が座っていた。

椅子に座った二人の女は小柄で、一人は薄桃色、もう一人は水色の髪飾りがやたらとついた下着らしきものを身につけていた。薄桃色の方は黄色い髪を頭の両側で縛り、手絡で飾っていた。水色の方は茶色い髪を頭の後ろで一つにまとめて垂らしている。こちらは手絡に大きな花飾りをつけていた。桃色の方は丸顔、水色の方は細面だが、どちらも童顔で十四五のように見える。

木馬に跨がっている娘はさらに小柄で子どものように見えた。白い半ば透き通った裾の短い服から細い足がのびている。黒い髪を肩のあたりで切り揃え、髪留めには黄色い蝶が留まっていた。

丸眼鏡の男が耳元でささやいた。

「嘘じゃなかったでしょう。ほら、あの娘ですよ」

男は小指で木馬の方を指差した。白い服の娘は木馬を揺らしながら、私の方を見て微笑み、小さな舌を出して唇をなめてみせた。

「おじ様、私と遊んで」

娘はまた木馬を揺らして、その動きに合わせるように腰を前後に動かし、陶然とした表情を作った。桃色と水色の娘たちがくすくすと笑った。

「検分しよう」

私は白い服の娘に歩み寄り、木馬から抱き上げた。

「何するの」

彼女はひどく軽かった。安手の香水の匂いがした。蟬の羽のような服からのぞく胸乳はささやかなものだったが、大人の女のもののように見えた。

「そんなに焦らないで」

娘は甘えた声を出したが、間近で見る化粧の濃い顔は子どものものとは思えなかった。

「君は幾つだ」

娘はちらりと私の背後に視線を走らせた。

「十、十一よ」

「本当のことを訊いているんだよ」

「意地悪言わないで、おじ様、本当よ」

彼女は私の首に手を回し、唇を寄せてきた。私は桃色の紅を引いた唇をかわして、彼女を木馬の上に下ろした。香水の匂いが鼻に残った。

「僕は本物を捜しているんだ」

「嫌な男ね」

木馬の娘はしかめっ面をして、舌を突き出してみせた。

「お客さん、無粋なことをしちゃいけませんよ」

太った男が棍棒のようなものを手にして寄ってくる。

「やっぱ指を折らなきゃならないかな」

丸眼鏡の男は太った男の後ろに隠れるようにしていたが、手にはもう短剣を握っていた。

「おとなしく遊んでいけばいいんだよ。嫌なら金を置いて帰んな」

「おいおい、まだ何もしていないだろう。第一、偽物じゃないか」

「今なら、まだ痛い目にあわなくてすむんだ。出すものを出すんだよ」

「正直に聞かれたことに答えてくれれば、痛い目にあわなくてすむんだがね」

太った男がもう一步近づいた。左手でのびた巻き毛をいじっているが、右手は棍棒を試すように小さく振っている。

「お前、誰だ。ここへ何しに来た」

「人を捜してるんだよ。知っていることを話してくれば、商売の邪魔はしないさ。騙されて遊んで楽しめる御仁もいるだろうからな」

太った男は棍棒を振り上げ、私は突き出した腹に拳を突き入れた。意外に固い手応えで、男は一瞬驚いた顔をしたが、そのまま棍棒を振り下ろした。かわして太い首に手刀をお見舞いしたが、男は長い巻き毛を振っただけで倒れなかった。

男は棍棒を振りかざして突進してきた。体当たりを喰らうのは勘弁してほしかったので、私は側にあった椅子を男に叩きつけた。椅子はばらばらに壊れ、男の額から血が流れた。怯んだ隙に脛に蹴りを入れると男は膝を折った。懐剣を抜いて後ろから首筋に突きつけた。

「話を聞きたいだけなんだよ。面倒事にしたいのか」

丸眼鏡の男は短剣を手にして、じりじりと半歩近づいては退いてを繰り返していた。

「来るなら早くしろ」

私がそう言うのと丸眼鏡の男は裏返った妙な声をあげて、飛びかかってきた。同時に太った男が身を起し、私を跳ね飛ばそうとした。私は逆らわずに後ろに跳んで、桃色と水色の娘の間に転がり込んだ。二人は悲鳴を上げた。また安い香水の匂いが鼻についた。

「馬鹿野郎、誰を狙っているんだ」

太った男が脇腹を押さえて、わめいた。丸眼鏡の男の短剣が突き刺さり、血が流れていた。丸眼鏡の男は言葉にならない声を出しながら、玄關の方へ逃れようとした。私は近くの椅子をつかんで投げつけた。椅子は男の頭に当たった。椅子は壊れなかったが、男はうめいてその場に倒れた。

私は倒れた男のところへ行き、右手の小指をつかんだ。

「あの木馬の娘の歳は幾つだ」

「知らねえ、そんなことは知らねえよ」

私は男の小指に懐剣を押し当てた。

「折るよりもこっちの方がいいか」

男は脅えた声で答えた。

「二十六、いや七だ」

すると部屋の隅から女がわめいた。先刻の甘え声とは別人のようだった。

「馬鹿、まだ二十五だよ」

「ふむ、たいした鯖の読みようだ。僕が捜しているのは本当に十一の娘だ。この界限で見かけたという話を聞いた。知っていることを話せ」

私は行方知れずの娘の容貌を話したが、丸眼鏡の男は知らないと言った。私は懐剣を持つ手に少し力をいれた。男は本当に知らないと繰り返し続けた。

太った男の苦しい声が聞こえた。

「痛え、痛え、医者を呼んでくれ。死んじゃうよ。医者……」

「あんたは知らないか。十一になるとんでもなくきれいな娘だ。こういう商売をしているなら、噂ぐらい耳に入るだろう」

「医者を呼んでくれ……」

私は丸眼鏡の男の襟首をつかみ、太った男の側に座らせた。血溜まりが少しずつ広がっていた。

「話が先だ。知っていることを話してもらおう」

「そんな娘のことは知らねえ。俺たちはそんな餓鬼を使うようなあこぎな

商売はしてねえ。客だって喜んで騙されてるんだ」

「そうかい、あっちの桃色の娘はどうだい。化粧でごまかしているが、本当に十四五といったところじゃないのか」

黄色い髪の娘が口を挟んだ。

「もう十六だよ、別にいいじゃない、幾つだって」

太った男は床の上で苦しげな顔を左右に振った。

「頼む、医者を呼んでくれ。セストリックという医者が近くにいます」

「セズ先生は墮胎医だよ、媚薬もくれるけど。あれでいいの」

木馬に乗っていた女がとぼけた口調で言った。

「ほんと馬のお医者様じゃなかった」

桃色の服の娘が言った。

「ああ、思い出した。その娘って、この前のお客が話していたあの娘のことかしらね」

それまで黙っていた水色の服の娘が言った。

「本当に小さい娘がこの街にいますって、言ってたわ。でも、誰でも客になれるわけじゃなくて、決まった何人かの男に囲われていて、他の男は近づけないとかって」

私は水色の娘にその娘の名前を聞いた。ヴィッチェンと客は言っていたと、彼女は答えた。名前など幾らでも変えられる。

「本当に十一か十二くらいのすぐきれいな娘なんだって」

「どこにいるんだ、その娘は」

「知らないわ。こういうお店じゃなくて、なんて言うの、妾宅、そういうところなんじゃないの」

「囲っている男の名前を聞いていいかい」

水色の娘は少し考えた末、答えた。

「あーん、グルム何とか、ああ、グルムドップ先生なら何とかなるか、とか言ってたわ。きっとその先生に取り入って自分も仲間にならせてもらうつもりなのよ」

私はその客の名前も尋ねたが彼女は知らないと言った。太った男と丸眼鏡の男も知らないと言った。念のため、太った男の腹を蹴ってみたが、本当に知らないようだった。

「墮胎医か獣医か知らないが、医者を呼んでやれ」

三人の女が顔を見合わせていると、丸眼鏡の男が立ち上がって、おずおずと出て行った。

三

グルムドップという名前には聞き覚えがあった。民議員を何年も務めている男で、民議会でもかなりの力を持っているという話だった。家業は確か大きな織物商、金も力も不自由はないだろうが、もっと別のものも欲しいのだろう。

グルムドップの家はアイトーネ街にあり、馬鹿馬鹿しいほど大きかった。門衛の小屋だけで、私の探偵局と同じくらいあった。幾らか探ると、週に一度、決まって〈御勤めの会〉とやらに出かけるということがわかった。敬虔なヴィンズク教徒なのだそう。行く先はテシアル通りのヴィンズク寺院らしい。ワブラ街からそう遠くはないところだ。

その夜は小雪が降っていた。私は寺院の向かいにある小さな堂宇の屋根の下でグルムドップの馬車を待っていた。寺院から詠唱が聞こえてきた。〈御勤めの会〉には遅参だろう。雪は少しづつ降り積もり、屋根が、道が、木々が夜目にも白く映り始めた。詠唱が途切れ、また始まった頃、黒塗りの四頭立て馬車が現れた。家紋も何もついていない、馬も黒毛で夜の闇に溶け込むような馬車だった。

寺院の脇では先刻から別の馬車が待っていた。こちら黒塗りが二輪二頭立ての小振りのものだ。

四頭立ての馬車から男が降りてきた。御者が傘を差し向ける。降りてきたのは大柄な小太りの男で、頭にヴィンズク教徒がよく身につける鍔なしの帽子を被っていた。御者は二輪馬車まで傘を差しかけ男を案内した。二輪馬車はグルムドップらしき男を乗せると走り出した。雪の夜道とあってか、並足で進んでいく。揺れる角灯と雪道に残る轍を追っていくのは雑作ないことだった。

馬車は一二度道を折れ、しばらく走ると背の高い生垣に囲まれた家の前で止まった。ワブラ街でも外れの方、あたりに店らしきものはなく、黄色い灯が漏れているのはその家だけだった。背の高い男は馬車を降りると

一人で家の中に入ってしまった。御者は生垣の脇の空き地に馬車を停めると、懷から小瓶を出して、ちびちびと飲み始めた。

生垣には門扉がついていたが開いたままだった。玄関扉は鍵が掛かっていた。私は家のまわりを回って庭の方へ出た。表から見るとごんまりした家に見えたが、庭は存外広く、植え込みや大小の石像が白い綿帽子を被って見えた。日の光の下で見れば手入れの行き届いた美しい庭なのだろう。

庭に面して露台があり、上半分に縦に長い細い硝子窓が並ぶ扉が連なっていた。私は扉の下半分に身を隠し、中の様子を窺った。暖炉には火が入り、色硝子の傘のついた大きな洋灯が、値の張りそうな綴れ織りの壁掛けや金泥で縁取られた箆筒、溢れんばかりに花が生けられた花瓶、大振りの松毬模様の長椅子などを照らしていた。

グルムドップは上着を脱ぎ、縫い取り飾りのついた白い襯衣の釦を外して長椅子でくつろいでいた。白髪の混じった黒い髪を後ろになで付けた四十過ぎの男で、体も大きい顔も大きい。長い鼻の下に黒い髭を蓄えて、いかにも押し出しが強そうに見えた。

左手に赤い葡萄酒の入った華奢な硝子の杯を持ち、右手で膝の上にまたがった娘の黒い髪を撫でていた。娘は大きな髪飾りのついた白い薄物をまとい、細い腕を男の首に回していた。着ているものはワブラ街の女とさして変わらないようだが、半ば透けて見えるほっそりとした身体は本当に子どものように見えた。こちらに背を向けていて、顔は見えなかった。

民議員は娘の背中まである黒髪を幾度も撫でさすり、時折赤い酒を口に含んでは膝の上の娘に口移しで与えているようだった。長い接吻をするたびに娘の頭は粘るように蠢き、黒髪が白い背中で波打った。

やがて男は酒杯を側の卓子に置き、大きな両手で娘の脇腹のあたりをつかみ、身体を少し浮かせるようにした。娘は頭を下げ、具合を確かめるように自ら腰を動かした。娘が身体を下ろすと、小さな喜びの声が聞こえたような気がした。

娘は男の膝の上で跳ねるように小さな身体を動かし、時折一物が外れるのか自ら身体を浮かしては深く沈めて、行為を続けた。さらさらという雪の降る小さな音を破って、甲高い喜びの声が聞こえた。娘はもどかしそうに薄物を脱ぎ捨てた。白い薄絹よりもその背中は白かった。雪白の肌に

色硝子を透した洋灯の光が奇妙な斑模様を描き、その上で黒檀のように黒い髪が揺れ動いた。

グルムドップは娘の胸乳に顔を埋め、のけ反った喉を舐め、また激しく腰を動かした。娘の淫声に混じって男の喘ぎ声も聞こえた。娘の身体が引き攣ったように動き、小さな白い尻が激しく痙攣した。娘は男の膝の上で大きくのけ反り、逆さまになった顔がこちらを向いた。上気した頬と濡れて光る唇が血のように赤い。悦楽に潤んだ目は半ば白目を向いていたが、男が身体を引き戻そうとした刹那、髪と同じように漆黒の瞳が戻ってきて、こちらを見た。

娘が何か叫んだ。私は露台から離れ、暗い庭を門扉の方へ走った。生垣は木立が混んでいて抜けられそうになかった。家の方で呼び鈴が鳴るのが聞こえた。玄関前まで来ると、門扉を押し開けて御者が入ってきた。

「何だ、お前は」

雪を被った外套の下に剣が見えた。衛士も兼ねているのだろう。驚きながらも、すぐさま剣に手をかける。

私は剣を抜かれる前に御者に体当たりした。扉に強く体を打ちつけて、男は体勢を崩した。私は御者の首を打ち据え、雪の夜道に走り出た。

四

翌朝には雪は止んでいた。娘のいた妾宅はもうもぬけの殻になっていた。張り番がいるわけでもなく、ワブラ街を少し探したが、何も得るものはなかった。溶け出した雪で靴が泥だらけになった。

グルムドップのところに行っても強請ばかりだと言われて警邏隊に突き出されるのが落ちだろう。あの家に押し込んで強引に娘を連れ出すという手もあったはずだが、そうしなかったのは、男との行為に耽る娘の姿に魅入られていたからかもしれない。

テルヴェにこの事をどう伝えたら良いのか。あなたの十一の娘さんは議員を含む何人かの男たちに囲われて、幸せに暮らしています、か。

ワブラ街やクラシーシャ街からイヌン川左岸にも足をのばして、グルムドップからの糸を手繰ろうとしたが、幾日かを無駄にした。誰も何も知ら

ないのか、あるいはどこからか箝口令を敷かれているのか、あるいは他の男たちなど存在しないのかもしれない。

手鏡を売ったという骨董屋はテルヴェが言ったとおりの場所で店を開いていた。ラグラン大通りの裏手の通りのかなり大きな店で、どこまで信用できるかは別として、クアロニアン帝国以前の家具調度やどこか南の遺跡から出たという素焼きの壺、夭折した幻の巨匠の作品だというひび割れた大きな肖像画等々、様々なものが並んでいた。

腰の低い主が愛想よく話をしてくれたが、鏡については何もわからなかった。元はどこかの古屋敷の屋根裏部屋から出てきたものらしいが、何人もの古物屋や骨董屋の手を経てきており、素性をたどるのは骨が折れそうだった。店主はただの珍しい古い鏡としか思っていないようだった。

足を棒にして街を歩いていると、生垣のある家で見た男の膝の上で喜悦に身を振らせる娘の姿が幻のように幾度も目の前に浮かんでは消えた。逆さまになった娘の顔は本当に現のものだったのだろうか。白い肌、黒い髪、赤い唇。だが、奇妙なことに「恐ろしいほど」美しいという娘の顔がどうにも思い出せなかった。

サンジェリイに紅灯の街は幾つもあった。ワブラ街に妾宅を持っていたとは言え、グルムドップのような「名士」が遊ぶのは傾城街あたりが順当なところだろう。テルヴェから受け取った金の残りを確かめ、外套を羽織ろうとすると探偵局の扉を叩く者があった。

「やあ、お久しぶりですね。商売はどうですか」

メドセアンは整った青白い顔に笑みを浮かべてそう言った。笑っていても、灰緑色の目にはいつものように冷たい光が浮かんでいた。人の心を見抜き、朧に未来を感じ取る特別な力を持った男だ。

「心配ご無用、君は羽振りが良さそうじゃないか」

メドセアンは一見灰色だが、角度によっては青や赤の色合いが見える高価そうな生地の上着を着ていた。一時警邏隊に雇われていたが、辞めてクラシーシャ街で探偵局を開き、失せ物捜しや占いのようなこともやって、評

判になっているらしい。

「お陰様で、まずまずといったところですよ。これからお仕事ですか」

「まあ、そんなところだが」

「私も仕事で来たんですよ」

メドセアンは来客用の隅の敗れた赤い長椅子に腰を下ろした。自分の用事を先に済ませる気らしい。私は仕方なく傷だらけの黒い机の奥の椅子に座った。

「ご依頼かね、一日四十ダズン、他に掛かりを頂きます」

「四十ダズン、そりゃあ安い。私は六十ダズンもらってますよ」

「商売熱心なことだ。それで用件は」

メドセアンは最近尋ねてきた依頼人の話を始めた。

「金のありそうなご婦人ですね。ちよっときつい顔立ちだけど大層な美形なんですよ。宝石でも盗まれたか、若い燕に逃げられでもしたかと思ったら、娘を捜してほしいと言うんです」

「駆け落ちでもしたのかね」

メドセアンは青白い顔に笑みを浮かべて首を横に振った。

「いやいや、まだ娘さんは十一だそうだね。フクスリナ神殿の森に沼があるでしょう。あのあたりで行き方知れずになってしまったと言うんです」
「底なし沼だという噂だろう。沼に落ちたんじゃないのか。警邏隊の仕事だ」

メドセアンはまた首を横に振ったが、今度は笑ってはいなかった。

「ひどく妙な話なんです。ご婦人の話によると、娘はもう死んでいる。その死体を取り戻したいと言うんです」

「沼の底を浚えということか。やっぱり警邏隊の仕事だ」

「沼にはいないんですよ。沼で死んだわけじゃないらしい。娘の死体はどこかに隠されていて——つまり沼でも墓穴ではないどこかですよ——それを取り戻して葬ってやりたいと言っています」

私は机の引き出しから古鴉のディコンを取り出した。メドセアンはいらないと言った。私は青硝子の杯に酒を注いで一口飲んだ。

「どうです、あなた向きの一件でしょう。だから何か知らないかと思って出向いたんですよ」

娘が死んでいることをどうしてその女が知ったのかと尋ねると、また奇

妙な答えが返ってきた。

「夢のお告げだそうです。夢の中で、横たわって目を閉じ、動かない娘の姿が見えたんだそうです」

私はもう一口ディコンを飲んで、メドセアンに訊いた。

「君はその女の話を用いているのか」

灰緑の目の男は肩をすくめた。

「難しいところですね」

「お得意の読心術だか千里眼だかで、確かめたんじゃないのか」

「お堅い女だね。同情する振りをして手を握って頭の中を探ろうとしたんですが、うまく逃げられました。まあ、言葉通りに受け取っているわけじゃありません」

「夢のお告げとやらで娘は居所は話さなかったのか」

「姿が見えただけで声は聞こえなかったそうです。まあ、死んでいるからですかね。死霊とかそういうものとは違うんでしょうね。ただ、ラプトツクルの僧院にいるのはわかったとか。娘の首にカスケート聖道教団のしるしが掛かっているのが見えたとかで。太陽と月が重なったあれですよ」
「そんな教団は知らない。娘の居所がわかっていいるのなら、どうしてここに来たんだ。君は筋道立てて話をするということができないのか」

メドセアンは端正な顔に苦笑いを浮かべた。

「ノップラント局長みたいな物言いですね」

「いいから、まとめて話をしてくれ」

カスケート聖道教団についてはアルザム教とジクロイス教が混じったような教えらしいというくらいしか、メドセアンも知らないようだった。フクスリナの沼にもラプトツクルの僧院にも行って見たが、娘の気配——死霊、霊魂、そう言ったものの残滓——は感じなかったとメドセアンは言った。

「娘の名前は何と言った。母親は」

メドセアンは細い白い指を顔の前で組んで微笑んだ。

「駄目ですよ。依頼人の秘密は守らないとね」

私はうなずいて、忙しいから早く帰れと言った。メドセアンは親子の名前は明かさなかったが、娘の容貌については話した。もちろん、髪の色も肌の色も人目をひく美貌だということも、私の捜している娘と同じだった。

私は手がかりになるようなことがあったら知らせると言い、メドセアンはもう少しラプトツクルの僧院を探るつもりだと言って帰っていった。

杯が空になっていたので、もう一杯ディコンを注いだ。父親も母親も探偵を雇って行方知れずの娘を捜している。それも別々に。しかも母親が捜しているのは娘の死体だ。だが、娘は幾日か前の夜はすこぶる健やかそうだった。夢のお告げというのは怪しげな鏡のお告げと言うことなのだろうか。

これ以上ディコンを飲んでも何もいい考えは浮かびそうになかった。私は探偵局を出て傾城街に向かった。

五

傾城街で遊ぶには金がいる。金だけでなく地位とか名前とかその手のものも入り用だ。金は幾らかあったが、他のものは持ち合わせていなかった。私はすぐ南側にある御者小路に足を向けた。傾城街の「名士」達の噂話、醜聞、秘め事、そういったものが集まるとされる場所だ。元は傾城街の客を乗せる馬車の御者たちが客待ちをしていたらしいが、彼らの漏らす主の噂話を求めて、今は新聞屋やいわゆる消息通も集まってくる。

金が掛かった馬車が何台も止まっている広場の先に色つきの提灯が下がった小さな拱門があり、その先が御者小路だった。狭い通りが右に左に曲がって続き、先が見通せない。両側には角灯や提灯を掲げた小さな飲み屋が連なり、道を半ばまで使って卓子と椅子を置いている店も少なくなかった。酒と食べ物、それに小便の臭いが漂っていた。

グルムドップとその仲間達の噂話を探ってみたが、出てくる話は奴は金にうるさいとか、本当はジャクレン教徒だとか、女には執着しないとか、そういう話ばかりだった。まあ、大人の女には執着しないのかもしれないが。

何軒か店を歩くうちに、私は一人の男につけられているのに気づいた。鍰のない薄っぺらい帽子を斜めに被り、受け口で顎が突き出している。色あせた青い上着を着て、首から小さな帳面を下げている。目つきは鋭いが、グルムドップが差し向けたにしては、荒事には向かない雰囲気だった。

スベルコ料理の店で申し訳程度に肉の入った煮豆をつついて、生ぬるいシエアを飲んでみると、幾つか離れた席からその男は私の前にやってきた。「ここに座ってもいいかね」

受け口の男は手にしたシエアの杯を小さな丸い卓子に置いた。

「駄目だと言ったら僕をつけ回すのをやめるのかい」

「おや、お見通しで」

男は勝手に私の向かいに座り、首に下げた帳面を手にとった。右手には鉛筆を持っている。

「新聞屋かい。ヨーコックのところでは見ない顔だな」

「ああ、『真実をあなたに』だね。あれはあれで御立派だけどね、俺はもう少し気楽にやらせてもらってるよ」

男はオスカンダと名乗った。夜の街をうろついて話の種を仕入れてはあちこちの新聞屋に売りつけていると言った。

「あんたのことも知っているよ。スナブ・ランケン、魔剣を持った探偵だ。その腰のものがそうかい」

「何の用だ。僕を知っているなら、君に話すことなどないくらいわかるだろう」

オスカンダは飛び出した顎をさらに突き出して見せた。

「そう、身構えなさんなよ。あんた、民議員のグルムドップのことを嗅ぎ回っているだろう」

「だとしたら何だと言うんだ」

「俺もちよつとあの先生が気になってね。アイトーネ街の金持ち連中しか診ない医者があるんだがね、こいつがちよつと怪しい薬で商売をしているって噂がある」

「そんな話は珍しくもないだろう。精力増強、若返りの秘薬、天上の夢が見られる薬、何でもありだろう」

オスカンダはにやにやしながらうなずいた。

「ああ、その通りだがね、このお医者様はトリプロ街の怪しい連中ともお付き合いがあるらしいんだ」

「グルムドップがその医者を通じて魔道士の上客になっているとも言うのか」

オスカンダはシエアを飲み干し、店主に空の杯を振ってみせた。串に刺

した肉を焼く煙越しに浅黒い肌の主がうなずいた。

「それはどうだか知らないが、その医者が最近グルムドップにとある薬を用立てたという話を小耳に挟んだのさ」

半分尻の見える短袴姿の娘がオスカンダの前にシエアの陶杯を置いた。受け口の男は私を見てうなずいた。私は娘に酒代を払った。

「何杯驕らせる気だ」

「酒はもういい。後は直に頂こう」

「まずは今の一杯の分を話せ」

オスカンダはシエアの泡を顎につけて笑った。

「何を言ってるんだ。ここまでの話がこの一杯だ。安いもんだろ」

私は事情通の男と短いやり取りをしてダズン金貨を一枚支払った。オスカンダはその医者がグルムドップに用立てたのはある種の毒消しの薬だと言った。

「減多に手に入らないナクシャッツかどこかの毒薬があつてな、これを飲まされるとじわじわと体中の肉が腐ってひどい死に方をする。そいつを飲まされた奴の命を救う薬らしいんだ」

「誰が毒を飲まされたんだ。グルムドップ本人じゃないだろう」

「奴の囲つてた愛人らしい。女遊びはあんまりしないとかいう噂だが、どうやらそうでもないようだぜ。奥方か、別の女が嫉妬して愛人を毒殺、なかなかいい話だろう」

私はオスカンダにもう一枚金貨を渡した。医者の名前はバシュコードだと彼は言った。その医者の弟子筋にワブラ街で墮胎医をやっている男がいて、話の出所はそこなのだという。

「セズトリック先生って奴か、そいつは」

オスカンダは少しばかり驚いた顔をした。

「ほお、よく知っているな。さすがは探偵殿だ。ところであんたはグルムドップを嗅ぎ回って何をしているんだ。奥方にでも頼まれたのかい。それとも政敵、モーデラムスあたりか」

「それを知ってどうする。グルムドップに話を持っていくのか、それとも政敵とやらにか」

オスカンダは突き出した顎を鉛筆の尻でつついた。

「どうだい、今、俺に払った金を少し取り戻す気はないか。つまり、あんた

の話を少し聞かせてくれれば……」

私は立ち上がって、男の顎をつかんだ。

「おもしろい男だな。金を受け取ったり渡したりがそんなに楽しいのか」

オスカンダは上目遣いに私を見て、薄笑いを浮かべた。

「受け取るだけの方が楽しいね」

私は手を放して、店を出た。

六

バシュコードの家はアイトーネ街の外れにあつた。裏手に回ればトリプロ街はすぐそこだ。本当にそちらの街の住人と付き合いがあるのなら、便利な場所だろう。

表からは主が医者だとわかるようなものは何もなかった。黒ずんだ灰色の石塀に鉄の門扉、建物も石造りの二階屋で、屋根も鼠色の石葺きだった。

玄関の呼び鈴を鳴らすとしばらくして使用人らしき三十絡みの女が顔を出した。暗赤色の裾の長い服に胸から裾までを覆う白い前掛けをつけていた。医者の助手か患者の世話人に見えなくもないが、やけに濃い紅を塗った頬と唇は夜の商売のようにも見える。

「セズトリック先生の使いで来た。ワブラ街の旦那の具合が悪いんで助けてほしい」

女は訝しげな目つきで私をじろじろと見た。

「誰だい、あんた」

女は腕を組んで玄関に立ちふさがった。

「セズトリック先生の使いだ。脇腹を刺されたワブラ街の旦那が死にそうなんだ。バシュコード先生に助けてほしい、そう伝えてくれ」

女の目つきはさらに陰しくなった。整ってはいるが顎や額が角張った硬い面相で、鞭でも持ったら似合いそうだ。

女は渋々うなずいて、犬にでも命じるように「そこで待ってな」と言つて背を向けた。扉が閉まる前に私は靴先を突っ込んだ。女は気付かず玄関奥の扉に消えた。

家の中には葉臭いにおいがわずかに漂っていた。短い廊下の先に開きかけの扉があった。男の声が聞こえた。

「セズトリックめ、何を考えているんだ。この私にあんなところへ出向けというのか、ふざけおつて。そんな奴は知らんと言って追い返せ」

「知らないというのはセズトリック先生ですか、それともワブラ街の旦那という人ですか」

女が聞き返した。

「どちらもだ。つまらんことを訊くな」

女の声の調子が突然変わった。

「私に向かって、そんな口を聞くのかい」

すると男の声もまた変わった。

「ああ、許しておくれ、マラータ。つい苛立つて君にひどい言葉を投げつけてしまった」

「鞭と首輪が必要なようだね」

「いかような罰も受けよう。だが、その前にその邪魔者を追い返しておくれ」

女の口調がまた変わり、抑揚のない声で「わかりました、バシユコード先生」と言った。

私は扉を開けて、部屋に入った。黒と焦茶の格子模様の床に長椅子と黒檀の大きな机が置かれていた。机は人が横たわれるほどの大きさで角には留め金のついた革帯がぶら下がっていた。壁の作り付けの書架には本がぎっしりと詰まっている。本棚のない壁には何枚かの絵が掛けられていた。一番大きなものは縦が人の背丈ほどあり、古のイスクラムかどこかの半裸の女王を描いたもので、その顔は使用人の女によく似ていた。

部屋の隅に細長い陶の花瓶が置かれていたが、花の代わりに鞭らしきものが何本か入っていた。

「何だ、お前は」

長椅子に座っていた灰色の髪の男が言った。濃い緑色のゆつたりとした立ち襟の長衣を着て、節くれ立った長い指を椅子の肘掛けにのせている。頬のたるんだ細長い顔立ちで、淀んだ灰色の目が私をにらんでいた。

「勝手に入って来るとは」

長椅子の脇に立っていた女はそう言いながら後ずさり、花瓶から鞭を一

本取った。

「やめてくれよ。僕はそういう趣味はないんだ」

「ターフェスがどうなろうと私には関係のないことだ。戻ってセズトリックにそう伝えろ」

バシユコードは横柄な口調で言った。

「ターフェス、あの太った男はそういう名前なのか。僕も彼がどうなろうと関係はないんだ」

「何だと、お前は何者だ」

「バシユコード先生、僕が知りたいのはあんたが毒消しの薬を作って渡した相手の居所だ。グルムドップのことじゃない。体の肉が腐って死ぬ毒薬を飲まされた娘のことだ」

「何を言っているのか、さっぱりわからないな」

バシユコードは骨張った指で肘掛けを何度か叩いた。女が素早く前に出て、黒く長い鞭が飛んできた。私は身を反らして危うく鞭をかわして、次の一撃が飛んでくる前に投剣を打った。的は外したが、女がかわす隙に懷に飛び込んで腹に拳を突き入れた。女はうめいたが倒れなかった。鞭を私の首に回して締め上げようとする。とんでもなく力がある。鞭で打たれたらひどく痛いだろう。

私はかろうじて鞭と首の間に指をいれ、女の顔に頭突きを食らわした。生暖かい鼻血が顔に飛び散る。もう一度頭突きを入れると力が緩んだので、女の腕から逃れた。首から鞭を垂らしたまま、ファバーン剣を抜いた。古の魔剣には魔力妖力の類いを感じ取って持ち主に伝える力が残っている。だが刀身の神秘文字は暗く沈んだままだった。物騒な女だがその手の力の使い手ではないのだろう。

女は血まみれの顔で別の鞭を花瓶から手に取った。先の方に刺がついている。これも閨房用なのだろうか。そんなものを振り回されてはたまらないので、私は黒檀の机の後ろに身を隠していたバシユコードに剣を突きつけた。女の前歯に当たったのか、額が痛かった。

「先生、彼女を何とかしてほしいんだ。一応、あんたがこの家の主なんだろう」

私はバシユコードの外衣の立ち襟と首の間に切っ先を突っ込んだ。首筋に赤い傷らしきものが見えた。医者はたるんだ頬をぶるぶると震わせ

た。

「マラータ、鞭を置くんだ」

女は朱に染まった顔に不満げな表情を浮かべたが、鞭を床に投げて手で鼻血を拭いた。私はバシユコードの襟首をつかんで黒い大机の上に押し倒した。机の上には艶の薄れた部分があり、それはほんやりとした人型のようなに見えた。両足の間にあたる所には白っぽい染みが重なって見えた。

「さて、バシユコード先生、話の続きだ。あんたは民議員のグルムドツプとその仲間が囲っていた娘のために毒消し薬を作った。娘はスニーヴィ、あるいはヴィツチェンという名前で歳は十一。あんたもお仲間の一人だろう。娘はちよつと前まではワブラ街の妾宅にいたが姿を消して、その後南方渡来らしい毒薬を飲まれた。間違いないな」

医者は首を横に振り、その度に頬が揺れた。

「私はあんな子どもに興味はない。少しばかり、薬を試してみただけだ」

バシユコードは壁際に腕を組んで立っている女が気になるようだった。

「何の薬だ」

「媚薬の類いだ。まあ、あの娘には必要なかったようだが。薬があつてもなくても、大層なものだからな」

「留守の間にそこであの小娘とやったのかい。あんたと二人、鞭で打ちのめしてやれば良かったんだ」

マラータが苛立った様子で口を挟んだ。

「言っただろう、薬をちよつと試したただけだ」

「試すってことは、やったってことだろう」

「痴話喧嘩は僕が帰った後に存分にやってくれ。娘はどこにいるんだ」

私はバシユコードの首に突きつけた刀を少し動かした。

「やめてくれ、話せばいいんだろう。あの娘は今ニーズクリープのところで」

「誰だ、そいつは」

医者は小さく首を横に振ったが、刃が首に当たったのか、顔をしかめた。

「ニーズクリープというのは何者かと訊いているんだ」

マラータが少しずつ、花瓶の方へ近づいているのが目に入った。私は剣を左手に持ち替え、まだ首に引っかかっていた黒い鞭を右手に持った。花

瓶に向けて振ると、花器は倒れて床の上で砕け散った。

「床の鞭を拾うには時間がかかる。やめておけよ」

女は忌々しそうに私をにらんだ。

「もう一度訊く。ニーズクリープとは何者だ」

「フォールケン伯爵の三番目の息子だ」

バシユコードはかすれた声で答えた。

「念のために訊いておくが、フォールケン伯爵というのは王宮で学事大臣を務めているあのフォールケン伯爵のことだな」

「そうだ。他にフォールケン伯爵はいない」

「ニーズクリープもあんたらの仲間の一入なんだな」

医者は小さくうなずいた。私はフォールケン伯爵の三男が娘を囲っている家を彼から訊き出した。

「さあ、もうこれで十分だろう。剣を除けてくれ」

「もう一つ訊きたいことがある。娘に毒を飲ませたのはあんただろう。どんな薬か知らないが、南方渡りの毒薬など、そう簡単に手に入るものじゃない。毒消しを作るのだから誰にでもできるわけじゃないだろう。殺そうとしたり生かそうとしたり忙しいもんだが、あの娘を殺してあんたに何の得がある」

バシユコードは何も知らないと言った。

「知り合いに消息通の男がいる。証なんぞ気にせずあることないこと書き立てて新聞に売りつける奴だ。奴に報せれば、明日にはあんたとその女の愛の睦言が街中に広がるだろうな」

「お前を八つ裂きにしてやる」

マラータがわめいて、止まっていた鼻血がまた流れ出した。バシユコードは溜め息をついて、ぼそぼそと話した。

「私が飲ませたわけじゃない。ただ、頼まれて毒薬を渡したただけだ。あの娘に使うなぞ、思ってもみななかった。商売敵か憎い男に使うものかと思っていた。僧院の下働きか誰かに金でやらせたんだろう」

「ラプトツクルの僧院か」

バシユコードは顔をしかめて小さくうなずいた。様子がおかしいと僧院から報せを受けて娘を診た医者は自分の毒薬が使われたことを知った。急いで毒消しの薬を調合し飲ませたが、娘はかすかに息があるものの目を

覚まらず、眠り続けていると彼は言った。

「どうして今はニーズクリープのところにいるんだ」

「順番だよ。フクスリナ神殿の森で行き倒れているのを拾ったとか言つて女衞に売りつけた奴がいた。女衞はグルムドップに若い娘を世話したことがあった。それで大金でグルムドップに娘を売った。若いなんてものじゃないからな。グルムドップは娘を仲間にお披露目して、皆のものにしようということになった。それで順番にそれぞれの別邸や人目につかない蔵とかに住まわせて通った。もちろん相應の金を払つてな。金にはうるさい男だ」

バシユコードは喉の奥からくぐもった笑い声を漏らした。首に押しつけた剣を少し動かして喉頸から血が溢れ出すのを見たいという衝動が沸き起こった。

「ニーズクリープめ、今頃はさぞお楽しみだろう」

私は医者 of 灰色の髪をつかみ、頭を揺さぶった。

「何かおもしろいこともあるのか」

バシユコードはかすれて苦しい息を漏らしたが、たるんだ顔には歪んだ笑いが張り付いていた。

「あの男は死んだ女が好きなんだ。死んで動かない女を抱くのが好きなんだ。幾度か死体を手配したことがある。今のあの娘は理想的なお相手だろう。腐りはせずに死んだように動かない。こんな素晴らしいことはない」

私は剣を持ち替え、柄頭で医者 of 顔を殴りつけた。どす黒い鼻血が飛び散るとマラータが小声で笑った。

「誰が毒薬の調合を依頼したんだ」

もう一度殴るとバシユコードは血だらけの顔で答えた。股間から小便が流れ出し、黒檀の机に新しい染みを作った。

「エネムットという女だ。タムツイー商会、紙問屋の跡取りだ。男漁りで忙しいくせに嫉妬深いあばずれ女だ」

バシユコードは血の混じった泡を吹きながらそう答えた。

「どうです、ちょっと洒落た雰囲気でしょ」

メドセアンは白い陶器の茶碗に注いだマシユウ茶の匂いを嗅いで、一口飲んだ。彼の探偵局はクラッシュ街の少し入り組んだ路地にあった。一階は茶葉や茶碗を売る少々気取った店で、脇の階段から直接探偵局に上がれるようになっていた。下の店の女主人と親しくなつて来客用の茶道具を安く買ったと彼は言った。どれぐらい親しくなつたのかは聞かないでおいた。

部屋の中はスベルコーニ風なのか、鮮やかな七色の窓掛けや失われた絵文字を織り込んだ敷物で飾られ、神秘的なのか滑稽なのかよくわからない猿や鳥、鰐に骸骨の彫り物などがあちこちに置かれていた。これも下の店の女の趣味なのだろうか。探偵局ではなく霊媒師の看板を掲げた方が似合うかもしれない。

私は籐椅子に腰を下ろして、一件のあらましを話した。マシユウ茶が私の飲んでいるものよりだいぶ高価なのは間違いなかった。

「面倒な話になってますねえ」

メドセアンは他人事のようにそう言い、机の上に置かれた骸骨の置物を指先でつついた。振り子仕掛けの髑髏がゆらゆらと揺れた。

「ワシエ・エネムットは自分の娘を毒殺しようとしたけれど、邪魔が入って中途半端なことになってしまった。それで、娘の居場所を突き止めて取り戻し、今度は確かに殺そうとしている、ということではないんでしょうか」

「そんなところだ」

「しかも毒を盛つたのも毒消しを作つたのも同じ医者だと」

「そうだ」

「しかし、父親は娘が生きていると信じて、あなたに捜してほしいと依頼した。エネムット婦人は使用人を使つて以前にも娘と夫を殺そうとしていたと。いやあ、ひどい話ですね」

メドセアンはマシユウ茶を飲み干し、急須から二杯目を注いだ。私にも勧めたが私はいらなうと言った。

「そっちは何か進展はあったのか」

「ラプトツクルの僧院をもう少しつついてみました。知ってましたか、あ

その院長は女性でね、サフロイスと言うんですが、男よりも女が好きで、若い尼僧に手を出したりしてるんですよ」

私はそういう教義なのかと聞いたが、メドセアンは違うと言った。

「カスケート聖道教団は禁欲主義が売り物で、悪い虫がつかないようにつて良家の子女が親に送り込まれたりするみたいですよ」

「悪い虫はどこにでもいる」

「いろんな虫がね。それでその院長のお気に入りだったっていう尼さんから話を聞き出したんですよ。ほんとに女が好きだって娘じゃないから、簡単でしたよ」

メドセアンは細長い指をくねくねと動かした。

「サフロイス僧正は僧院の娘たちだけじゃなくて、どこかでもっと若い娘にも手を出していたって話なんです。何でも『良くなる薬』をくれる医者が出て、そこからの伝手で年端の行かない子どもみたいな娘を紹介されて、夢中になってたって」

「ラプトックルの僧院には娘の気配はなかったんだらう。バシユコード先生は僧院から呼ばれたと言っていたが」

「仮初めに死んでいたからか、ニーズクリープという男のところへもう移されていたのかもしれない。グルムドップはあなたに嗅ぎ回られて僧院に娘を送った。『順番』かもしれないがね。ところが娘は毒を盛られて死にそうになり、同じ医者で毒消しで、死なずにすんだ」

「それで、『順番』で今はフォールケン伯爵の息子のところか」

「本当に『順番』かどうかはわかりませんよ。学事大臣の息子は死んだ女が好きなんですよ。お仲間が始末に困ってるところを、喜んで引き取ったのかもしれない」

私はぬるくなったマシユウ茶をすすった。冷めかけてもよい香りがした。ニーズクリープという男は半ば死んでいる動かない娘を抱いて、満ち足りた気分を味わっているのだろうか。

「どうでしょうねえ、この一件。エネムット婦人は自分の娘を文字通り葬りたいんでしょうかねえ」

「まずは娘を連中の手から取り戻すことさ。後のことは後で考えるしかない」

「ずっとそうやってこの仕事を続けてきたんですか」

私はそうだと答えた。メドセアンは肩をすくめて、仕方ないという風にうなずいた。

八

ニーズクリープの別宅はレドマンド共同墓地の近くにあった。サンジェリイの東の外れ近く、あたりには幾つかの寺院や神殿がある。ラプトックルの僧院もその一つだった。伯爵の息子が別邸を構えるにはうら寂しい場所だが、彼にとってはいろいろと都合がよいのかもしれない。

墓地の東端に背の高い木が生えており、壊れかけた煉瓦塀を隔てて、ニーズクリープの家が建っていた。大臣の三男の妾宅とは思えない古びた家で、伸び放題の蔦に覆われて壁も窓も半ば見えなかった。庭木も伸び放題で、膝までの叢が庭中を覆っていた。茜色に染まった夕空に墓地の木が黒々と枝を広げ、その下の家はさらに暗く沈み込んで見えた。

蔦に覆われた窓の一つに灯が点った。先刻、馬車で乗りつけた二人の男が家の中に入ったのを私とメドセアンは墓石の陰から見ていた。一人は黒い頭巾付きの外套に身を包み、もう一人は灰色の鍔広の帽子を被り灰色の長衣をまとっていた。

馬車は二人を降ろすとすぐに走り去った。灰色の男は幾らか背が丸くなっており、杖をついていた。黒い頭巾の男がニーズクリープだと思われたが、灰色帽子の男が誰なのかは見当がつかなかった。

「何か感じるか」

メドセアンは首を横に振った。

「ここからじゃ何もわかりませんね。そちらはどうです」

私は腰のファバーン剣の柄に手を触れてみた。かすかに不穏な感触があるようにも思えた。半ばまで抜いてみると、刀身の神秘文字がわずかに緑色に浮かび上がって見えた。

「どうなんです」

「あの灰色の男に何かあるのかもしれないが、ここは墓地だからな。そのせいかもしれない」

「彷徨える靈魂か何かですか。そう言われるとちよつと寒気がするような

気もする」

メドセアンは自分の肩を抱く仕草をした。どこまで本気なのかはよくわからない。

どこかの寺院から夕べの鐘の音が聞こえてきた。

「そろそろ行くか」

「逆の方がいいんじゃないですか。つまり、あなたが玄関で私が裏口の鍵を開けた方が。錠前破りは結構得意ですよ」

「鍵はさつき確かめた。あのぐらいなら大丈夫だ。バシユコード先生から僕の話が伝わっているかもしれない。だから君が玄関だ」

メドセアンは渋い顔でうなずいた。

私は壊れた塀から家の裏庭に入り込んだ。藪の中を抜けて台所脇と思しきところの裏口にたどり着き、鍵穴に針金を差し込んだ。メドセアンは表にまわり、フオールケン伯爵の使いと称して扉を叩いているはずだった。鍵を開けるのに少々手間取った。メドセアンの方がうまいかもしれない。表からの声や物音は聞こえなかった。裏口のすぐ脇が台所だった。竈門に火は入っておらず、人の気配もなかった。家の中は香でも焚いているのか、妙な香りがした。かすかに何かが腐ったような臭いもあった。

薄暗い廊下を通り、突き当たりの扉の前で立ち止まった。わずかに人の声が聞こえたが何を言っているのかはわからない。メドセアンが家の主と話しているのだろうか。

剣を抜くと、墓地で見たよりもファバーン文字がはっきりと見えた。握った手にもわずかに痺れるような感覚があった。

扉には鍵はかかっていなかった。そっと開けると、香の匂いが強くなった。部屋の中は青い淡い灯で照らされていた。青く色付けされた四角い洋灯が四隅の壁から下がっている。私の入ってきた扉の右手に祭壇様のものが設えてあり、硝子の棺らしきものが置かれていた。水晶にも似た六角柱のような形をしている。彫り物が施された金色の細枠に硝子板が嵌め込まれているようだ。中には花に囲まれて白い衣と面紗に覆われた小さな体が横たわっていたが、硝子の光の加減ではっきりとは見えなかった。部屋は窓のない板張りで何の装飾もなかった。私の入った扉の向かい側に別の扉があるが閉まっていた。天井は角錐状に次第にすばまっている。頂部には明かり取りか通風口があるのかもしれないが、今は暗い闇の

中だった。床の中央には黒い円形の敷物が敷かれ、棺の前に置かれた香炉からうつつすらと煙が立ち昇っている。敷物の上に灰色にわだかまるものがあつた。それは最初、黒い敷物の模様のようにも見え、また大きな灰の塊のようにも見えた。

それは動いて頭をもたげた。後頭部の妙に突き出た細長い頭には髪はなく、刺青なのか描いているのか、黒い細かな文字らしきもので覆われていた。眉のない白い顔に穴でも穿ったかのような黒い目が並んでいた。頭を覆う黒い文字の一部が頬から唇の両端に及んでいて、まるで口が耳まで裂けているかに見えた。その口が動いて、低い声で呪文らしきものをつぶやいている。

声が止まり、黒い穴のような目が私を見た。冷たい手が胸元に差し込まれたかのような悪寒が走った。

「ウグナールⅡチャウグン、ユグナールⅡハウグン、ソトⅡコ、カヴァツク」

灰色の男は今度ははっきりとした声で呪文を吐き出した。色のない唇が動くたびに、顔から頭へと書かれた文字が蠢くように見えた。冷たい手で心の臓を鷲づかみにされたように感じた。

その時、向かい側の扉が物音とともに開いた。黒い頭巾の男が背中から部屋に倒れ込んだ。灰色の男がそちらを振り向き、心の臓から冷たい手が離れた。

「お父上からの使いだと言っているのに、聞き分けのない息子だな」

メドセアンが反り身の刀を手にして部屋に入ってきた。部屋の中を見回して眉間にしわを寄せる。

「モルクナント、何とかしろ」

黒い頭巾の男がわめいた。

「もう少しところで邪魔をしおって」

モルクナントと呼ばれた灰色の男は苛立った声を上げた。その手にはいつの間にか杖が握られていた。振じれた灰色の木の杖で、頂部には銀色の半球形のものがついている。親指でその球形の蓋を押し開けると、モルクナントは杖を振り回した。銀色の半球の中から灰のようなものが飛び散る。

「ジョグⅡルフア、ファグⅡルブオ」

怪異な呪文が唱えられると、四散した灰は蠢く煙と化し、さらにもっと実体のある姿となった。ぼろぼろになった屍衣をまとった骸が半ば骨と化した指をこちらにのばしてくる。顔には肉と筋の名残のようなものが張り付き、乱れた髪が幾筋かまとわりついている。

死骸は歯がむき出しになった口から笛のような音を吐き出して、襲いかかってきた。腕を振り回すと肋のあたりから蛆らしきものがこぼれ落ちた。

私はファバーン剣をその腕に振り下ろした。驚いたことに死骸は刀身を両手で受け止めた。生きている時は武芸者だったのだろうか。朽ちた体のどこから力が湧いてくるのか、死骸は私の剣を握り、ひねって奪い取ろうとする。刀身の神秘文字が明滅し、死骸の指から白煙が上がった。

私は剣を奪おうとする死骸の力に合わせて、剣を斜めに滑らせた。青緑の火花が散って、奴の指がばらばらと飛んだ。脇腹から斬り上げると肋が何本か折れて、体が傾いた。

もう一度剣を振り下ろし、首筋から胸まで斬り裂くと、骸は崩れ落ちて元の灰に戻った。

私は灰色の男が別の呪文を唱える前に剣先を突きつけた。男は驚きと怒りに顔を歪めた。刺青が虫のように蠢いて見えたが何も起こらなかった。

黒頭巾の男はメドセアンに剣を突きつけられて壁際に立っていた。色つきの洋灯に照らされて、その顔は真っ青に見えた。水色の目をした痩せた男で、黄色い髪が額に垂れかかっていた。目の下には深い隈があり、しわが寄っていたが、四十前くらいだろうか。細い首に喉仏が飛び出して見え、尖った鼻と相まって、鳥を思わせる容貌だった。頭巾から銀の大きな耳飾りがのぞいている。細長い指にも彫り物の施された銀の指輪が幾つも光っていた。

「あんたがニーズクリープだね」

黒頭巾の男は喉仏に押しつけられた刃を見下ろして、何も言わなかった。「学事大臣フォールケン伯爵の三男のね」

メドセアンが剣の平で男の首をぴたと叩いて、付け加えた。

「それで、あんたは誰なんだ。お見せ頂いた術からすると死霊術師の類いなんだろうが」

灰色の男は溜め息をついた。

「モルクナント、死霊術師、霊媒師、口寄せ、反魂師、何とでも好きに呼ぶがいい」

「ここで何をしている」

モルクナントは硝子の棺とニーズクリープを交互に見て、薄笑いを浮かべた。

「ニーズクリープ・ツォン・フォールケン様からのご依頼で、そこな娘御の靈魂を呼び戻そうとしていたのだよ」

「モルクナント、貴様」

伯爵の息子は死霊術師をにらみつけたが、メドセアンの剣が喉に食い込むのでそれ以上のことはできなかった。

「お主たちこそ何をしておる。警邏隊には見えんし、人の家に押し入って大事な儀式を台無しにしおって、どういうつもりだ。私はご依頼の仕事をこなしてただけだ」

モルクナントは開き直ったのか、落ち着いた口調でそう言った。

「こちらでも仕事のご依頼を受けてね。その娘を取り戻したいというご依頼なんだよ」

「取り戻すだと。サフロイスに頼まれたのか。破戒僧め、神の奇跡の証などと言って見世物にするつもりだろう」

ニーズクリープは私にすみかかろうとしたが、メドセアンが少しだけ剣を動かしたので、首を押さえてその場にうずくまった。

「血だ、血が出ている。モルクナント、何とかしろ。誰か手当てをしてくれ」

ニーズクリープはわずかに血のついた指を目の前で動かして、わめき散らした。

「ちよいと皮を切っただけですよ。死霊術師は生きた人間は相手にしません。バシユコード先生を呼ぶほどではないし、もちろん、サフロイス僧院長も必要ない。あなたにはまだ死んでもらうつもりはありませんからね」

メドセアンはそう言って、伯爵の息子の側にしゃがみこんだ。

「何、心配はいりませんよ。私が手当てをしてあげますよ。さあ、その手を出して」

メドセアンは剣を黒頭巾の男の首に突きつけたまま、片手で血のついた

手を握った。

「何をするんだ」

「静かにして、私の目を見てください。ああ、剣はあなたが持っていてください」

ニーズクリープはメドセアンから剣を渡されて、それを自分の首に押し当てた。

死霊術師が興味深げに二人の方を見た。

「お仲間は術者なのか」

「さあね、僕もよくわからん。あんたも診てもらうかい」

「遠慮しておこう」

メドセアンは剣を渡して空いた手をニーズクリープの喉の傷に当てた。その手をゆっくり動かし、頭中の男のこめかみに滑らせた。ニーズクリープは薄青い潤んだような目を見開き、目の前の男に向けたまま動かさなかった。自分の首に当てた剣を持つ手が震えていた。

メドセアンは少しの間、わずかにうなずいたり、首を傾げたりしていた。それからニーズクリープの手から剣を受け取り、立ち上がった。大臣の息子ははっとした様子で、汚れを落とすように手を擦り合わせたり、額をこすったり、首の傷をさすったりし始めた。メドセアンは灰緑の冷たい目で黒頭巾の男を見下ろした。剣を持つ手に一瞬力がこもったように見えたが、それを動かすことはしなかった。

「何か見えたのか」

私の問いにメドセアンは小さくうなずいた。

「いろいろとね。隠すよりも吐き出したかったのかもしれないね。この男は薬で死んでいるとも生きているともつかない娘を引き取ってきて、何度も犯した。腐らない“死体”はある意味理想的だったんでしょねえ。ところが、その内、娘のわずかな吐息や鼓動を感じて、この娘が生きている姿を見たい、いや、生きている娘と交合したいという思いが生じたみたいですねえ」

「それで死霊術師を雇って娘の霊魂を肉体に戻そうとしたっていうことか」

「そうですね。身体はバシユコード先生の毒消し薬で死なずに済んだ。反魂の術だか何だかで魂を戻せば、蘇ると考えたらしいですね」

モルクナントが「ほう」と声をあげた。

「たいしたものだな。どうだ、私と組んで商売するというのは。死んだ者にもその術は使えるのか」

「あなたこそ、警邏隊に自分を売り込んだらどうです。死霊を呼び出せるんなら、殺された者に殺した相手のことを喋らせれば、警邏隊は大助かりだ」

モルクナントは何か小声でぶつぶつ言いながら首を横に振った。ニーズクリープは自分の両手を見つめては擦り合わせることを繰り返していたのを止めて、腰が立たないのか、硝子の棺の方へ這っていった。棺の中のをぞき込み「ヴィツチェン、ヴィツチェン」と娘のもう一つの名前を呼んで泣き崩れた。

「死んだ者は死んだままにしておくのが一番だ。死んだ女が好きならそれでいいのに、つまらぬ夢を見るからこういうことになる」

死霊術師はうんざり顔でそう言った。

九

メドセアンと私はニーズクリープとモルクナントを家の中で見つけた紐で縛り上げた。死霊術師は諦め顔、伯爵の息子は抗う気力がないようだった。メドセアンが近くのヴィンズク教の寺に行き、私と彼の依頼人に報せを出した。

私の依頼人の方が先にやって来た。テルヴェは髪を整える間も惜しんだのか、焦げ茶の髪が乱れて額にたれ掛かっていた。部屋の中の奇妙な様子を見て、一瞬立ち尽くした。

「ランケンさん、一体これは」

私が答えるより早く、彼は硝子の棺に駆け寄り取りすがった。

「スニーヴィ、スニーヴィ、どうしてこんなことに、スニーヴィ、私の愛しいスニーヴィ」

「テルヴェさん、慌てちゃいけません。お嬢さんは亡くなつてはいない」棺の主の父親は身を起してこちらを見た。泣きはらした赤い目で、縛られている二人と腕を組んで立っているメドセアンを見回した。

「この人たちは何者です。私のスニーヴィに何をしたんです。死んでいないのなら、どうしてこんなことになっているんだ」

「どこから話してよいものか、難しいところですが、まあ、聞いてください」

「私も話を聞かせて頂くわ」

部屋の戸口に女が立っていた。黒と紫の身体に張り付くような服をまとい、大きく開いた胸元に紅玉を嵌め込んだ銀の首飾りが光っている。切れ長の黒い目に高い頬と尖った鼻、唇には沈んだ色合いの紅を差し、結い上げた黒髪にも宝石をちりばめた銀の髪飾りが光っていた。美しい女だが刃物のような冷たさがある。

「やあ、これはエネムット婦人、お呼び立てしてすみませんねえ」

メドセアンが組んでいた腕をはなして、柔らかい声で話しかけた。女は鋭い視線で夫を一瞥し、それからメドセアンに言った。

「これはどういうおつもり。あなたは依頼人の秘密を守ることができないの」

「いろいろと事情がありましてね。ああ、こちらはスナブ・ランケン、私と同業です。あなたの夫君から依頼を受けて、娘さんを捜していました」

エネムットは私に視線を向けた。長い睫毛で縁取られた黒い瞳には射貫くような光があった。私は軽くうなずいて挨拶を済ませ、縛られた二人を紹介した。

「こちらはニーズクリープ、娘さんを、何と言うか、預かっていた男です。こちらはモルクナント、死霊術師です。娘さんの靈魂を呼び戻そうとしていたようです」

床の上の二人を汚いものでも見るかのような目つきで見たのは、エネムットもテルヴェエも同じだった。

「エネムット、お前がスニーヴィをこんな目に合わせたのだな、自分の娘を殺そうとするとは。スニーヴィが元に戻らなかったら、お前を殺してやる」

テルヴェエは今にも妻につかみかかろうかという調子で叫んだ。

エネムットは激昂する夫を見ても、表情を変えなかった。

「まあ、何て恐ろしいことを。私が何をしたと言うの」

女は縫い取り飾りのついた黒い手袋で頬を押さえたが、やはり表情は変

わらなかった。

「この人でなしめ。お前はスニーヴィを殺そうとして、この私も殺そうとしたではないか。レニードが私に白状したのだ」

テルヴェエが震える手で妻を指差し、そう叫んだ。

「レニードですって。あんな下郎の言うことなど信じているの。あの男はスニーヴィをさらってどこかに売り飛ばしたのよ。もしかすると私を脅して身の代金を巻き上げようとしたのかもしれない。でも、怖じ気づいてどこかへ逃げ出した。どこにいたと言うの、レニードは」

テルヴェエは何事かに気づいたかのように一人うなずいた。

「お前、レニードを殺したな。知っているぞ。お前があいつとできていたのを。いいように使って、最後は殺したな」

エネムットはメドセアンの方を見て、落ち着いた声で言った。

「お分かりでしょう。この人はどうかしているのです。異常に嫉妬深く、下男に始終疑いをかけては首にするので、これまでも大変だったのです。揚げ句の果てにこんなことをいい出すとは」

テルヴェエは赤らんだ顔を歪ませて、奇妙な笑いのようなものを浮かべた。「嫉妬深いだと、それはお前のためにある言葉だ。自分の娘の美貌に嫉妬して殺そうとする母親がどこにいます。お前は自分がこの世で一番美しいと思っている。そう思わずにはいられないのだ。どんな人間もやがては年老いる。若き日の輝きは失せていく。お前はそれに耐えられない。どんなに高価な美顔水を使っても、トリプロ街の怪しい薬師から手に入れた薬湯に浸かっても、時の流れには抗えない。それで、日々輝きを増していく娘に嫉妬し、殺そうとしたのだ。あの鏡はどうした。もう一度お前の恐ろしい顔を見てみるがいい」

自分の言葉に酔ったように、テルヴェエの声は次第に大きくなった。モルクナントは小さく首を横に振り、自分は関係ないと示した。

「スニーヴィを殺してどうするつもりだったのだ。心の臓を貪り食い、生き血をすすり、若さと精気と美しさを自分のものにしようとしていたのではないのか。生憎、豚の心臓だったらしいがな。その方がお前にはふさわしからう」

エネムットは醒めた面持ちで夫の告発を聞いていた。テルヴェエの言葉が途切れると静かに言った。

「とうとうそんな恐ろしい妄想までするようになってしまったのね。あなたは自分の行いに怖れと罪を感じているのよ。そして、それを私に押しつけようとしている。ありもしない恐ろしいことを頭の中で作り出して」

「私が何をしたと言うのだ。私はただ、愛しいスニーヴィを取り戻そうとしただけだ。お前の血まみれの手から守りたいだけだ」

テルヴェは両手を振り回して、そう叫んだ。エネムットは呆れたような顔をして夫を見た。暗い紅を引いた口元に薄笑いが浮かんだ。

「あなた、この人から何と聞かされて仕事を引き受けたのか知らないけれど、肝心のことはもちろんお聞きでないでしょうね」

エネムットは私に向かってそう言った。

「娘さんを捜して欲しい、それだけです」

彼女は尖った顎を上に向けて、声を出さずに笑った。

「この人ね、自分の娘とできているのよ。ただの仲のいい親子じゃないの。まだ十一の自分の娘と交わっているのよ」

テルヴェは紅潮した顔で怒鳴り散らした。

「何ということ言うんだ。お前が恐ろしいからスニーヴィは私の部屋へ逃げてきたのだ。眠っている間に恐ろしいことが起きると震えていたのだ。お前はそうして私を破滅させ、スニーヴィを殺そうとしているのだ」

エネムットは今度は声を出して笑った。

「私の言うことが本当かどうか、スニーヴィに聞いてみましょうよ。そのあなた、死霊術師なんでしょう。娘の霊魂とやらを呼び戻してくださいな」

モルクナントは不機嫌そうに答えた。

「そんな簡単にできるものではない。途中で邪魔が入ったので、星辰の位置を見定めて一からやり直しだ」

女はメドセアンの方に目を移した。

「メドセアンさん、私はあなたの千里眼とやらの力に期待して依頼したのよ。何とかしてくださいな。随分余分なお金もお支払いしたでしょう」

メドセアンは肩をすくめて首を振った。

「生きている人間なら少しはそういう力も使えますよ。でも、娘さんにはどうでしょうねえ。それより、エネムット婦人、テルヴェさん、あなた方のお手を拝借して、ちょっとだけ心の内というものを見せていただけない

でしょうかね。その方が確実ですよ、多分ね」

力なくうなだれていたニーズクリープが突然笑い声をあげた。

「それがいい、そうしろよ。みんな頭の中に手を突っ込んでもらえ。腐った脳味噌をみんなかき出してもらえ。いい気分になれるぞ」

ニーズクリープの引きつった笑い声が部屋の中に響いた。そのいかれた笑い声に紛れて、何か別の音が聞こえたような気がした。

「おい、いい加減にしてくれ」

私はフアバーン剣を大臣の息子に突きつけたが、ニーズクリープはまだしゃくり上げるような奇妙な笑い続けた。

「何か聞こえなかったか」

メドセアンは眉根にしわを寄せた。

「蹄、いや馬車か」

彼がそう答えた時には、もう大きな足音が近づいてきた。

「奥様、遅くなりました」

黒い革鎧に身を包んだ男が部屋に入ってきた。がっしりした体つきで、浅黒く角張った顔に黒い口髭を生やしている。腰には反り身の長剣を吊っていた。男は一人ではなかった。男のすぐ後ろから二人、ほとんど同時に私が入ってきた裏手の戸口からも似たような出で立ちの男が二人、入ってきた。隊商の護衛などやっている者たちを雇ったのだろう。まともな奴もいるがそうでない手合もいる連中だ。

男たちは私たちの姿を認めるとすぐに剣を抜いた。エネムットはすつと身を退かせた。

「どういうつもりですかね」

メドセアンの問いにエネムットは答えた。

「娘の亡骸を運ぶには人手がいると思ひまして頼んだのです。急なことだったので、手間取ったようですわ」

「申し訳ありません、奥様」

細長い顔の男が軽く頭を下げてみせた。慇懃な態度を取っているが、刃物を使うのに躊躇いは見せない類いの人間だろう。

「馬車の用意は大丈夫なのね」

「はい、奥様、表につけてあります」

エネムットは美しい顔に毒のある笑みを浮かべて、私たちを見回した。

「スニーヴィは私が丁重に弔わせてもらいます。不逞の輩に拐かされて命を落とした不幸な娘として」

「ふざけるな、スニーヴィは私のものだ」

テルヴェが叫んだが彼女は意に介さなかった。

「お集まりの皆さんは、どうぞ静かにお引き取りください。メドセアンさん、残りのお金は後ほどお届けします。依頼人の秘密はきちんとお守りください。ランケンさんとおっしゃいましたね。あなたにもご苦勞をおかけしたようです。いづれ改めてお礼いたしますわ」

革鎧の男たちは剣を構えたまま、一歩ずつ、前へ出た。私たちは床の上で縛られて座っている二人のまわりで雇われ者たちに対峙した。テルヴェは硝子の棺に取り付き、娘は自分のものと主張し続けた。

「渡さんぞ、スニーヴィは私のものだ。愛しいスニーヴィ、スニーヴィ。お前、私を殺すつもりだろう。この男たちはそのために雇ったんだだろう。私だけじゃない。ここにいる者はみんな殺すつもりだ。お前は人殺しだ」

エネムットは少しいつむいて、悲しげに首を振るような仕草をした。

「ああ、あなたはもうすっかり気がふれてしまっているのです。かわいそうなあなた。自分の娘の虜になって、正気を失っているのよ。いいえ、正気をなくしたから、我が娘とそんなことになっているのかしら。もう、私にはわからないわ」

「いかれているのはお前だ。スニーヴィを引き取って何をするつもりだ。今度こそ、心の臓を食べるのか。ああ、そいつは新しい男だな、またくわえ込んでしゃぶり尽くすつもりか。気をつけろよ、そいつは人殺しだ」

テルヴェの台詞の終わりは口髭の男に向けたもののようだった。馬鹿げたやり取りが続く中、五人の男たちはじりじりと近づいてくる。二人で何とかなるだろうか。口髭の男は幾らか腕が立ちそうに思える。

その時、私は足下でモルクナントがもそもそと動いているのに気づいた。足先で床に散らばった灰を集めているようだ。ちらりと視線を落とすと、死霊術師の奇怪な文字が書かれた頭がわずかにうなずいたように見えた。エネムットとテルヴェの声に混じって、かすかに呪文らしきものが聞こえた。ファバーン剣の神秘文字がうっすらと緑色に光り始めた。

「あなたの声を聞くのはもううんざりよ。さあ、もう済ませておしまい」

「はい、奥様」

口髭の男が合図して、表からの男が一人、裏口からの男が一人、棺の方に向かった。

「やめろ、娘は私のものだ。誰にも渡さんぞ」

わめくテルヴェに男たちが刃を突きつけようとした。その時、ファバーン剣から痺れるような感触がはつきりと伝わってきた。

床の上の灰が旋風でも起きたかのように一気に舞い上がった。それは青白い光を発し、部屋の中を飛びまわった。ところどころには、引きちぎられた手足や身体の一部らしきものが見える。ばらばらになった死体が部屋の中をでたらめに飛びまわり、剣を持った男たちを打ちすえた。

私とメドセアンは同時に飛び出し、怪異に慄く男たちに剣を叩きつけた。メドセアンが裏手から来た男の腕に斬りつけ、男が血を流して倒れるのが見えた。私は表からの男の肩口に斬り込んだ。安手の革鎧が裂け、怯む男の腿に切っ先を向けた。男は血の噴き出す足を押さえて頽れた。

棺に向かっていった男の一人にはテルヴェが齧り付いていた。文字通り耳朶に噛みついていたので。飛びまわる死骸の髑髏がその男のもう片方の耳に噛みつき、男は悲鳴を上げて棺から離れた。もう一人、棺に近づいていた男にメドセアンが向かった。私は口髭の男に剣を向けた。

男は飛びまわる死骸のかげらをうるさそうに剣で薙ぎ払い、斬りかかってきた。少なくとも肝は据わっているようだった。斬撃を剣で受け、横に流そうとすると、男はすかさず足を使って私を蹴り飛ばそうとした。私は蹴りをかわして、剣でその足に斬りつけようとしたが、男は私の胸を狙い剣を横に振り回す。危うくかわして、二度三度と刃が噛み合った。

なかなかの手練れだったが私には味方がいた。青白い死んだ手が罅迫り合いの最中に奴の首に絡みついた。目の前で半ば骨と化した指が男の喉に食い込むのが見えた。ファバーン文字が明滅する。

私は奴を押し込んで、剣を引いた。前のめりになった男の頭に刃を打ち込むと、額に巻いていた鉢金が割れて、鮮血が噴き出した。

振り返るとメドセアンの相手も首筋に一撃を受けて絶命していた。棺の側では両耳を食い千切られた男が血まみれの顔を押しさえてのたうち回っていた。後の二人も傷口を押さえてうめいている。テルヴェは棺の側で口のまわりを血だらけにして放心したように座っていた。

「役立たずどもめ」

エネムットはそう毒づいて、黒髪から銀細工の髪留めを引き抜いた。彼女がそれを一振りすると細身の刃が飛び出して短剣となった。

「今夜はこれでお暇しますわ。娘は必ず取り戻しますからね」

エネムットは刃をこちらに向けたまま、じりじりと戸口に近づいた。

テルヴェの動きは素早く急で、私もメドセアンも止められなかった。手には耳を食い千切られた男が取り落とした剣が握られていた。剣は深々と彼の妻の腹に突き刺さった。

「もう邪魔はさせない。スニーヴィは私のものだ」

テルヴェは女の腹に突き刺した刃をさらに深く突き入れようとしたが、その前にエネムットは握った短剣を夫の胸に突き立てた。

「死ね、下郎め」

エネムットは二度三度と短剣で男の胸を刺した。血飛沫が上がり、二人から流れ落ちる鮮血が床に血溜まりを作る。

エネムットは突然力を失い、短剣を夫の胸に残したまま頷れた。紫の靴下に包まれた足が引きつって蠢く。テルヴェは血があふれ出る胸の傷を押さえて、よろよろと棺の方へ近づいた。途中で膝を折り四つ這いになりながら、硝子の棺に取りすがった。

「スニーヴィ、スニーヴィ、私のスニーヴィ、目を覚ましておくれ、スニーヴィ、お前の父様だよ、スニーヴィ、スニーヴィ」

テルヴェは血まみれの手で金の枠に硝子の嵌まった棺の蓋を動かそうとしたが、その力は彼に残ってはいなかった。

「スニーヴィ、愛しいスニーヴィ」

テルヴェはつぶやくような声を残して、娘の棺に手をかけたまま死んだ。エネムットの側に懷から転げ出たのか、方形の板状の物が落ちていた。掌より少し大きめで金色の縁がついている。ファバーン剣を近づけると、刀身の神秘文字が淡い緑色の光を発した。

背を上にして落ちていたそれを拾い上げ、鏡があるべき面を見たが、そこには何も映っていないかった。テルヴェが言っていたように、僅かな黒の明暗で複雑な編目模様らしきものが朧に見えるだけだった。落ちた拍子に入ったのか、ひび割れが一筋二筋走っていた。

「それが例の手鏡ですか」

メドセアンが指を伸ばして、黒い表面に触れた。すぐに彼は手を放し、

こめかみを押さえてひどい洪面を作った。

「何ですか、それ。ひどくいやな感じだ。早くその剣で叩き割るか何かしてくださいよ。持っていないじゃないやしませんよ」

メドセアンほどではないかもしれないが、私もその黒い手鏡から悪寒のようなものを感じていた。

「あんな、これが何だかわかるか」

私は床の上で縛られたままのモルクナントの目の前にそれを差し出した。死霊術師もまた渋い面持ちになった。

「〈ヴォルパールの鏡〉だな、これは」

床の上で死霊術師が言った。

「〈虚栄の鏡〉とも言う。持ち主の意を酌んで、より美しく、よりたくましく、より賢しく、姿を映して見せる。だが、それは一時だけのこと。次第次第に鏡は曇り、歪み、持ち主の不安を煽り気分を損ねる。だが、捨てることはもうできない。見続けていると、憎しみ、妬み、嫉みを感じる相手映し出し、悪心の種を賑わらせる。鏡に映った幻の自分を取り戻そうと、持ち主は悪事を重ねることになる。鏡はその手助けもするらしいが、私も初めて見る代物、それ以上はわからない。随分と古いものだが、まだ残っていたのか」

「そんなもの、何のために作ったんだ」

メドセアンがこめかみを指先で押しながら言った。

「さてな。世に認められぬ不運な魔道士が悪意と不幸を広めたかったのか、あるいは、もしかすると、世の人々に慰めと励ましを与えたかったのかもしれないが」

「持ち主の悪意が魔力を歪めたとしても言うのか。どちらにしても、始末した方が良さそうだね」

私は鏡を床に置き、ファバーン剣を振り上げた。すると、死んだものと思っていたエネムットの腕が動き、指先が鏡に触れた。

突然、黒い鏡に像が現れた。歪み、朧に蠢くそれはエネムットの顔だった。鏡像は乱れてはまた形を成し、側に横たわる女の顔を映し出した。奇怪なことにその顔は千々に乱れてはまた像を結ぶ度に若返っていく。十八九の若く美しい女の姿となり、さらに時を遡り、十四五の初々しい娘の姿となった。鏡の中のエネムットは揺らめきながらさらに幼くなり、十代

初めの輝くばかりに美しい娘の姿になった。雪のように白い肌、黒檀のように黒い髪と瞳、血のように赤い唇。それはワブラ街の家で見た、思い出すことのできない娘の顔のように思えた。

鏡のひび割れが急激に広がり、蜘蛛の巣のように鏡面を覆った。美しい娘の姿は一瞬でかき消え、《虚栄の鏡》は砕け散った。黒い硝子の欠けらの中で歪んだ金色の枠だけが形を残していた。

鏡の持ち主はもう少しも動かなかった。

十

「さて、どうしたのですかね」

生き残りの三人の雇われ者が傷を押さえて、家から出て行った後、メドセアンが死体の転がる血まみれの床を見渡して言った。

「それは僕が聞きたいところだね」

モルクナントが縛られた体を窮屈そうに動かした。

「おい、そろそろ解いてくれないだろう。死体なら私が何とかしよう。いろいろ使い道があるからな。余ったら、裏の墓地に捨てるだけだ。それに、私はお主たちを助けたんだ。無罪放免、いや、礼が欲しいくらいだ」

私とメドセアンは顔を見合わせ、彼を縛っていた縄を解いた。

「ありがたいことだよ、死霊術師殿」

「荒っぽい仕事が多いのか、お主たちは。こういうことで困ったら私を呼べばいい。ただし、次からは只ではできん。相応の代金を頂戴する」

「遠慮しておこう」

私はそう答えたが、メドセアンは妙に納得したような顔つきで黙っていた。

モルクナントは痺れを取るように手足を動かし、それから死骸を引きずって部屋の中へ並べた。懐中の小瓶から薄緑色の粉を出して骸に振りまき、小声で呪文を唱えた。一瞬、並んだ死体がぴくりと動いたような気がした。

「後は奴らを呼び出してからだ」

「奴らって誰だ」

メドセアンの問いに死霊術師は答えた。

「屍食鬼だ。役に立つ奴らだよ。餌は必要だが」

メドセアンは眉根をひそめ肩をすくめた。

「こちらのお方はどうしたものでしょうねえ。屍食鬼の餌かなあ」

「生きている人間は食わんよ、奴らは」

ニーズクリープは壁に背をもたせかけて、床に座っていた。斬り合いの最中、床を転げ回って難を逃れていたのは目に入っていた。そのせいか縄がだいぶ緩んでいたが、解く気力もないのか、うなだれて座ったままだった。

縄を解くと男はぼんやりとした顔で私を見上げ、それからゆっくり立ち上がった。血まみれの部屋の中と並んだ死体を順繰りに見た。テルヴェが残した血の痕をたどるようにして、視線は硝子の棺の方へと動いた。

よろよろと棺へ近づき、ひざまずくと蓋に手をかけて動かし、音を立てて蓋が床に落ち、硝子が割れる音が部屋の中に響いた。ニーズクリープは棺の主を抱き起こすと、白い面紗をまくり接吻した。

ひゅーという笛の音のような息の音と、軽い咳き込む音が聞こえた。

ニーズクリープの腕の中で白い屍衣をまとった小さな体が動くのがわかった。白い衣よりもお白い細い腕が男の黒衣の背中を抱きしめた。

二人は抱擁し、言葉もなく接吻を繰り返した。

「ふむ、私の秘術が効いておったのだな」

自嘲の言葉なのか本気でそう思っているのか、死霊術師がそうつぶやいた。

「愛の奇跡というやつでしょうかね」

メドセアンは首を傾げて、口の端に薄笑いを浮かべた。

「そんなものがその男の頭の中にあつたのか」

「さあ、手をつたなくてもすくい取れるものは僅かですからね」

ニーズクリープの黒衣の背の上でスニーヴィの白く細い腕は蛇のように動き回り、二人の唇が重なる小さな音がいつまでも聞こえていた。